

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 64: 88-105
Issue date	1898-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5087
Right	

習々微風入草堂。柳眠花笑露凝香。遲々日影春窓下。和夢鶯聲惹興長。

對雨

獨對春窓思悄然。夜來微雨似梅天。眼前無復見飛鳥。占滴遠簷日若年。

踏青

拔

山

江南江北草萋々。行入煙中望欲迷。一路踏青無近遠。不覺西岫夕陽低。

全

日暖風和花滿枝。山村水廊細風吹。吾生未識農家事。隨處踏青追蝶兒。

春夜聞笛

草堂無友獨傾觴。簾外園林逗月光。何者半宵吹玉笛。滿身花影憶家鄉。

雜報

◎紀元節拜賀式

かけまくもかまこき皇祖の御門、大御身に大刀
取りおぼし、大御手に弓取りもたし、御軍を率ゐ
給ひ、あらぶる夷等を事むけ給ひて、こゝに我大

帝國の皇基を樹たせ給ひてより以來、國運蒸蒸日上、
天運と共に極まりなし。こゝに二千五百五十八
年二月十一日は實に此嘉瑞の日に當る、午前八
時、學校長を初め本校教職員生徒一同、雨天体操
場に集ひて、兩陛下の大御影を拜ま奉り、諸聲
に『雲に聳ゆる』の祝歌を唱へ、歡天喜地、滿堂を
震撼す、式終りて堂を出づれば、龍田山の松の緑
白川の水と共にますます清さを覺ふ。

わはれ、悲しきかも、去年の一月には、我國大母陛下、神隱くれましゝ、まづるを、又ことし、二月、山階老宮殿下、あえなくもならせ給ふ、大御國の凶事はより大なるものはあらざるべし。まかのみならず、東洋の天地、日を追うて多事。かけまくも、かしこけれど、我今上皇帝陛下の大御心如何ばかりかと思ひまつれば、血淚滂沱、抑えんと欲すと雖能はざるなり。誠恐誠懼、謹みて茲に敬悼の微衷を表し奉る。

大院君薨

半島のお傑、大院君薨す。渤海の月、長白山の雪に
隠、其れ是を如何。此時朔風吹いて波濤高く、暮
雲沈みて層巒昏し。

借問す。雲を排して妖嬈を拂ふものは、抑も誰が
任ぞ。

◎自炊紀念日

(靜池投)

去月十五日は我校第七回の自炊記念日なり。是より先き數日炊事委員室にては三長屢々額を集め思慮を凝らし深く當日の作戰計畫をなすものの如くなりしが越へて其前々日に至り室内頻りに動搖めき時々鎗音の起るを聞く蓋し謀略既に定まり撃々として戰鬪準備に着手せるなるべし孫子いへるあり夫れ謀は密なるを貴ぶと三氏亦此言を用ゐしものか秘して發せず吾人をして徒らに豫想のうちに徘徊えて春日の遅々たるを悟らざらしむ、かくて十五日は來りぬア、昨日までは所謂春眠曉を覺へず寢所に在つて欣然啼鳥を聞きし身が今日は六時の起床に目さめて千金の一刻を犠牲にせしと笑止なる、出で、戶外を眺めば先づ寮の玄關には國旗を交叉し習々たる東風これを翻して殊に泰平の象を示す自習室より食堂に通ずる廊下の兩側には幔幕を張り軒の下には球燈を二行に釣るし五色の短冊片々として其間に舞ふ恰も胡蝶の百花に戯るゝが如く身は早や塵外數里の郊野に逍遙して駘蕩たる春風に浴するの感あり浩る處に可憐の少年突如として我側に來り莞爾一楫えて曰く兄等幸に聞け今

日は紀念の佳辰にしあればこの内には種々の裝飾をなせ見せ物を設く願くば緩々觀賞し以て十分の快を盡くし十二分の祝意を述べられたしと雪白の右手を舉げて食堂を指す遠山の眉丹花の唇われ嘗てかゝる好少年あるを聞かず夢なるか？否、現なるか？否、彼は慥かに我が制帽と制服とを着す借問す郷は抑も何處何室の誰ぞ凝視數秒彼れ笑ふて答へず須臾にして彼れの動かざるを思れば何を圖らむこれ一幅の繪画にまて畫家某君の理想的同窓たらんとは、冷笑一番行くこと數歩にまて食堂の戸口に達す此處に一兵士あり銃を捧げて吾人を迎ふ其傍に片紙あり題えて炊夫の寄附といふ依て再び兵士を見れば則ち純然たる見立細工にして茶碗箸皿桶杓子等皆炊事用の器具を用ゐ竹輪を以て兩眼となせる里芋を以て鼻となしたるなど其配合宜しきを得一見實物と誤認せまむ炊夫の手工とまては感すべきなり、兎角する間に圖曉たる叭聲遙かに朝食時間の到るを告ぐ由て闐然堂に入ればげに美はしの食堂や、蝶舞ひ鳥囀り時ならなくにこゝに嵐山の彌生を寫し吉野の景を呈す見よ頭上數尺の

所には縱横無礙に糸を張りこれに釣るすに數百の紅燈と數千の國旗とを以てし無慮數萬の色紙は其間に翻つて遠きは五色の雲と見え近きは晚霞の虹に類す四圍の白壁には豫て募集の祝詩祝文狂詩狂歌を貼付して寸地を残さず扁額あり挿花あり所々に配置して美觀を添ゆ誠に天上樂土の園地の如く殆んど常日の食堂とは思ひもつかぬ有様なり偕箸を取つて膳に向へば小豆の飯は例に由て祝意を表する記號にして松魚の膾は神州慣用の獻立とかや皿に少許の菜根あり噛み得ば以て百事の成るべきを示すものか、食し終つて更らに堂内の裝飾を巡視するに東端の壁に椿花を寫せる額あり其下に卓を置き膳を供ふ膳の傍に極美の色紙あり『つとひ來てこゝに椿の下陰に早や七とせとなりけるかも』と思ふにこれは椿幹事への蔭膳なるべし聞く同幹事は七年以前我校の幹事にてまじくし自炊制度は主に同幹事の創設にかゝるものなりと、また其傍に蔭膳あり紙片に肝屬先生の席と書す同先生は創立以來殆んど六年我が炊事監督となり二千有餘日恰も一日の如く精勵せられし人にして昨年夏閑

を乞ふて郷地に歸られたるなり我が自炊制度の
今日ある兩氏の力與つて多きに居らずんばあら
ず故に毎年此の佳辰には必ず蔭膳を据ゑて以て
永く其功德を忘れざらしむ誠に故ありといふべ
し、次に詩歌の披露を一覧するに或は龍山の松
に比し或は白川の水に譬へて自炊の萬歳を祈り
紀念の祝賀を謠ひたる多かりける中にも罪行
飽飾の『願くば鼻の下にてわれ食はんそのささ
らぎの望月の日に』又は無名子の『飯をたく煙消

えぬと思ふ間に雲や霞と立てる人々』の如きは
最も人の願を解きしなるべし其他數へ歌、朝飯
の歌、狂句俳諧長歌絶句律詩など擧げて數ふべ
からず而て是等は皆大形の西洋紙にものしたれ
ば墨跟今尚ほ濕ふが如く筆者の名こそ知らまは
しけれ、畫家某君の繪畫こゝにも亦數葉あり趣
向皆斬新にまて頗る人の注意を惹く、再び扁額
の下に來つて熱視するに額は戸板一枚の大さに
して一面に青海草を塗り大根を以て紀念の二字
を大書す數十の貝杓子を組んで縁となせる板鉄
を用ゐて印章に當てたるなど只妙といふの外な
し其下に松竹梅の插花あり松には二羽の折鶴を

垂げ下には一尾の靈龜あり相共に紀念を賀する
が如し後にて聞けば額と龜とは青戸君櫻井君の
設計に由ると流石は工科生なり思ふに一昨夜來
の龜音もこれが製作の故なりしか、かゝりし程
に食後一時間の休憩は何時しか過ぎて始業喇叭
の音を聞く、これより毎時の休憩時間歸寮する
毎に獨り能勢監督の食堂廊下を往復奔走せらる
るを見る幹旋の勞思ひやるべし。

* * * * *

午砲轟く、賓主の席既に定まる、時に委員長八波
君出で、食堂の中央に立ち一言の挨拶を述べそ
の結尾にいはいく譬令世は堯季となり天下の人心
は滔々として輕薄浮華に陥るども獨り我校に遊
ぶの士は皆禮讓に厚く義氣に富み公共の觀念充
ち満ちたれば自炊制度の將來は竜田の松の青さ
限り白河の水の盡きざる間は決して絶ゆること
なく否な寧永遠に繼續せざるべからずと然り校
風の大半は朝夕三度の食事の際食堂内に於て養
成せらるゝを信ず次に吉丸君立つて一同に告げ
ていはく、自炊の紀念日はやがて習學寮紀念の
日にして習學寮の紀念日は則ち我校の祝事なり

雜誌部は聊か之れを祝せん爲め諸士に醴酒一獻を呈せんとす願くば二時半より來り會せよと拍手喝來堂に充つこゝに一同祝飯を喫す能勢監督は三長と共に校長數頭をはじめ舍監學寮係及び自炊の爲め専ら盡力せられたる炊事委員長諸士の接待をなま炊夫は白布の新衣を着けて給仕をなす、其日の馳走は言はずもがな、或人曰く『調如似天人之饗』と又曰く『紀念日や笑顔をうつす膳の上』と、興正に酣にして吉丸君再び立つて自炊の萬歳を三呼す衆これに和し其聲天地に震ふ『祝ひ日や和氣霽然と堂にみつ』食後例に由り御用商人に響應ありしと更に聞く本年は商人の寄附例年よりも稍多かりしと蓋し能勢監督遊説の結果なるか、午後二時三十分雜誌部委員室前には人の山を築く而して皆欣欣然たり一椀の醴酒も時に取つての一好物、當日の興を添へたる少少にあらざるべし、夕飯後炊事部より各室に茶菓を配ばる各室由て茶話會をなす餘興日比に數倍し歡聲和韻室に滿ち發して寮内の大親睦となり更愈闊けて興益募る、如此の快事近來其例を見ず誠に盛なりと謂つべし、當夜人々の歌ふ所

を聞けば桃江子の作にて左の如くなむ可祝
朝な夕な折たく柴のきはしたに

たえぬ煙の末をこそ祈れ。

◎端艇部第二回遠航

寒威厲酷、人をまて肌革慘慄たらしむ、此時に當り、爐を擁して整居するも、尙ほ寒氣の骨に徹するを覺ゆ、寒は一而已、寧ろ爐を捨て、身を風雪に曝すに如かざるなり、且夫れ眼を開ひて西方を望めば、遼東の邊、膠州の陸、陰雲暗澹として天日光なく、將に機に乗じて焦天捲地の劇を演ぜんとす、幾多の志士は慷慨禁せず、腕を扼し、齒を切し、内は以て國力を強め、外は以て國威を宇内に輝かさんことを是れ力む、吾人白面の一書生、事理に暗く世事に疎きものと雖、此際、豈飽食煖衣、徒に貴重なる光陰を過えて可ならんや、須く大に養ふ所なかるべからざるなり、是に於てか、吾人は、修學の餘暇、漕艇の術を練磨し、因て以て身体を壯健にし、膽力を強固にし、海國男兒の本分を忘れざらんを謀り、推して之を外に及ぼし、聊か以て海事思想の發達を助けんと欲す、明年一月には、第一回遠航を近津三角に行

ひしも、距離短きに過ぎ、且平々坦々、遠航の眞味を味ふこと能はざりき、健兒の鉄腕、空しく鳴ること茲に一星霜矣、脾肉徒に脹り、雄心轉た禁すべからず、乃ち各期休業を機とし、校長部長の許可を得て、長洲地方に向はんと欲す、會々葦北地方の有志、近時大に感奮する所あり、海事思想の養成を謀り、端艇設備の議あるを聞く、吾人は於てか、全有志の本を務むるに急にして、事をなすに敏なるを贊え、幾多同感の諸子と相談するの快を思ひ、長洲行を止めて葦北遠航を企て、日奈久、佐敷、津奈木を歴て遠く水俣に至らんとす、其行程往復凡そ一百參十海里餘、カッター大連を先鋒とせ、龍田、花岡の二艇を従へ、一月四日纜を解き、遠航の途に上るに決す、豫定人員總て十有七名、發程の日を待つこと千秋も嘗ならず、夢裡常に心を葦北の風光に馳せずんばあらざるなり、吹けよ風、立てよ波、有明海の風伯如何に荒るゝとも、不知火海の激浪如何に吼ゆるども、健兒の眼中には、已に有明不知火の兩海なし、豈又風浪に於て何かあらんや、(一月二日記)

出發

一月四日は、午前四時援錨の豫定なり、されば、出發の便をはかり、三日午後十時、砂取濱屋に集合を約す、然れども人事の意の如くならざるを如何せん、全夜十二時迄に集る者、僅かに野坂、石坂、吉田、松村、龜井、目下部、富田、戸次の八名他は皆病氣又は事故により會する能はざるものなり、乃ち十二艘カッターなる大連一艘を出すに決す、何れも劣らぬ猛者の面々、寒さ知らずのつわ者なれば、氣焔萬丈、談笑の聲は家も崩れんばかり、門出の祝ひに一酌せんと一人が云へば、げに尤もの事と、衆議忽ち一決し、酌ひや名に負ふ三徳酒、忽ち起る軍歌の聲、『年立ちかへる新玉の、春とは云へどまた寒き、頃も厭はず大丈夫が、遠く乗り出す筑紫潟、舟は木の葉の如くにて波は山より高けれど、搦子は大和の花と呼ぶ、筑紫のはてのをのこなり……』意氣斗牛を衝くとは此の如きをや云はん、出發は午前四時なり、夜を徹せんには如かずと云ふものさへありしも遂に午前二時に褥に就く、

『冬の夜寒の風さえて、音だに寒ささむしろに、衣かたしき』まどろむ暇もなく、三時半に起き出

で、朝食をすまし、握飯など調へ、川舟二艘にて星の光りをたより砂取川を下るに、手足忽ち凍え、悚然として肌粟を出す、艇庫に着せしは四時なり、斯くて艤装に三十分餘を費やし、いざ出發と云ふに、冬涸れに湖水大に減じ、一寸も動かばこそ、止むことを得ず、水に入りて更くこと數十間、松嶋の側に至りて漸く浮び出でぬ、通常のボートならんには、深き膝を没する所も容易に浮ぶべきも、大連はキールの高さへ六寸餘ありて、吃水甚だ深ければ、殆んど股に達する頃ならざれば浮ぶこと能はず、試に思へ、盛夏の候と雖早朝の入水は決えて心地よきものならぬを、さらでだに、いとし寒けき冬のあまたは、身体忽ち縮み上る心地するになん、曳き終りて乗艇せし時は已に五時となりぬ、乃ち悠然として漕ぎ出づれば、十二の鉄腕齊しく鳴り、艇は矢の如くに進み行く、元より慣れず航路なれば、暗けれども、差支たる困難とてはなく、下江津も何時しか過ぎて、加勢川に入る、之よりは只流に順ひて下るのみ、

●●●
川下り

中の瀬を過ぐる頃、東天少しく紅を呈す、六本の檣聲に、水禽の眠を驚ろかすこと幾何なるを知らず、木部橋を過ぎて漕ぐこと數丁、犬淵の邊、兩岸竹林相連り、下は乃ち碧潭、綠藍相映して境轉た清し、吾人嘗て名けて竹溪と云ふ、蓋ち加勢川唯一の景勝なり、時に旭日東山の上に出で、清光竹葉の間より來り、朝風和かに艇旗を動かし、爽快云ふべからず、皆大聲快と呼ぶ、大慈寺の堤と杉嶋橋の難處も何時しか過ぎ、水淺くして幾度か膠せんとせしも、急漕一番、八時川尻に着く、乃ち艇員兩三名を上陸せしめ、空瓶を購ひ、水を入れて飲料に具へ、休憩三十分にして發す、密柑を経て大曲に入れば、河市益廣く、迂回するに従ひて、濁波漸く起る、北方を望めば、慘まじき黒雲一團を、小代山の方面にかゝりたる、すわ妖雲よと見る間もなく、颯と吹き來る北風に、艇は岸に打上げられんづ有様なれば、皆力を限りに漕ぎ下す、二丁を右舷に望む頃には、風はいや増しに強く吹き荒み、浪も從て高くなりぬ、斯る危急の場合に際して、腹中一物なく、食慾はむらむらと發し、又如何ともするなし、一人曰く、前

程なほ遠く、風波大に起る、川口を出でざるには此の如し、若し夫れ遠く岸を離れんか、風浪の激しきや知るべきのみ、此時に當りてや、一同必死の力を盡さるべからず、殊に時は已に十時を過ぐ、須く今に於て晝食し、徐ろに元氣を復ちて、以て激浪に對するの覺悟なかるべからずと、衆以て然りとす、然れども如何にせん、寸時たも橈を放さんか、艇は淺瀬に乗り上ぐる恐あり、加之退潮の矢先、悠々寛々とて止るべきにもあらねば、兩艇各一人宛、交るゝ晝食をすまふ、更に勇を鼓して進む、

有明海の風濤(危機一髪)

川口を出れば、風伯益暴れ、激浪奔馬の如く、鞆々として艇側をうち、飛沫征衣を沾はす、西北風なれば、岸に沿ふて航するは、却て不利にして危険ならんと、先づ嶋原半嶋の北端を目標とて、數里の沖に出で、順風に乘じて、三角に入らんと欲す、始めの程は、眞直に波を乗り越せしが故、さしたる危険はなし、されども乗り越す度に、漕手より見れば、舵手の位置は忽ちにして天に沖するが如く、忽にして那落の底に陥るか如く、橈

は少しもきかばこそ、或時は波の頭に奪はれんとし、或時は波の凹りに空めぐりし、艇の進行は平時の半にもあらず、かゝる場合にも、減らぬは口にて、今日の風浪は、偏に金刀比羅大權現の崇り給ふなれば、一心に神明を祈らば、必冥助あるべしと、一人がいへばさてはからしき事をいふものかな、大權現とて何程の事かし給はん、御崇りとは却ておもしろし、いざ一番猛惡の本性を現はし、現權様と氣根競べをしてくれんと、いひも終らぬに『勅任官が來た』と叫ぶものあり忽にして艇は崩れんばかりに震動しぬ、蓋し大浪の頂、白泡を冠る、其の外見勅任官の禮帽の如し、是より白浪を稱して勅任官といふ、かくて、艇は住吉を距る大約二里余の沖に出でぬ、始めの程こそ、戯言も吐きたれ、瘡我慢もまたれ、今は陸は漸く遠く、風はいや増に強くなりもて行き、浪の艇を弄ぶさま、すさまじなんぞいふばかりなし、かゝる時に至りては、一言だも發するものなく、只時に、『シツカリ』の聲をさくのみなるぞあはれなる、前方に『ハセ』あり、是より直に針路を三角に轉せんとす、『ハセ』の近傍に至れば、

波浪こどに激しく、すわといふ間もなく、艇は横さまに『ハゼ』に吹き付けられぬ、左舷の橈は『ハゼ』の爲に漕ぐ事能はず、右舷には激浪幾百どなく襲來し、其度毎に轉覆せんとする事幾回なるを知らず、今は全く漕ぎ出す力もなくなりぬ、只浪の暴るゝがまゝに任せざるべからず、百計茲に盡さ、運命此に定まり、相顧みて言なし、嗚呼此時の心中、余は之を筆にする能はず、之を口にあらはす能はず、進退維窮まるとは此の如きをや言はん、然れども天は全く吾人を棄てず、今しも艇は『ハゼ』の半間餘も破れたるところに來れり、機失ふべからずと、右舷の漕手は力を限り漕ぎ出せば、艇の上半は『ハゼ』の外に出づ、折しも寄せ來る大浪に、事なく『ハゼ』を破りぬけ、直に三角に向ふ、此時、風は忽ち方向を轉して、折角の辛苦は水泡となりぬ、加之、横波を受けるに至り、危機は一層に迫れり、艇は左にゆられ、右に傾き、時にメッ／＼と響くを聞く、今は艇を前に進むるより、寧ろ覆没を避くるに忙はしく、左に傾けば、左舷の橈をたゞきつけ、右に傾けば、右舷の橈をたゞき付けて、其平均を保た

んことを力むるのみ、三角に着せんことだに覺束なくなりぬ、即ち止むなく、一時難を長濱に避け、風波の治まるをまちて、三角に向はむと欲し、針路を左に轉すれば、艇は矢の如くに馳せ、十餘分にして長濱に着す、時に午後二時なり、此地遠淺にゑて艇を寄すべからず、即ち之を淺瀬に引き上げ、石坂氏一人艇中に留まり、他は袴を脱して徒渉す、深さ膝を没するばかり、今まで、波浪に惱まされて、覺えざりし寒氣は、虛に乗じて襲ひ來り、肢体全く凍え、足元定まらず、さなきだに、餘れる波の來たるにあへば、潮水股に達して、不快云ふべからず、げにや、第二軍の花園口上陸もかくやありけむ、我身先づ其難を受けずば、いかでか、人の難を察し得んや、七個の怪物が、スゴ／＼として渡り行く有様は、恰も主なき瘠犬の、雨にぬれつゝ、人家をたよりに食を求むるが如し、やう／＼にして長濱につく、一小漁村なれば立寄るべき家もなし、辛うじて一茶店を得たり、之に入るに、火なき焚きてもてなす、さて何處よりか來給ひたると問ふにぞ、熊本より來りし由を答ふれば、此頃の暴れに、如何にし

てか此處までは來給ひたると、いたく驚く、沖の方を望めば、敕任官の數百萬人も集りたらん如く、帽頭立并びて慘まじき其中に、石坂氏一人、艇を護ちて浪と争ふまゝのはの見ゆるに、吾等とても男の片くれ、石坂一人に塞き目見せて、をめぐると過さるべきや、殊に氏の心細さを思ひやれば、焚火もあたゝかき心地せず、いざ是より再び艇に歸らんとて、茶店を以て出で、一漁夫に會ひ、夕なぎやあると問へば、答へて曰く、風は夕に至らば二層強まるべし、各方は熊本より來たまひまか、さりとては危険なる事をしたまひけるものかな、吾等は、此四五日が程は、漁にも出侍らず、明朝に至らば、少しく靜まるべし、今より三角に向ひ給はんは、一層危険なり、長濱網田は、共に波止あれども、出入不便なれば、住吉に歸り、朝なぎに乗して三角に入り給ふに如かずと云ふに、さらば艇に歸りて萬事を談せんとして、朝の如く徒渉すること丁餘にして、艇に達し、玆に八人頭を集めて、一小會議は開かれぬ、皆云ふ様、風波何かならんや、此鬼の如き面相を持ち乍ら、是しきの事に避易して、引き歸えたりと云は

れては、弓矢の耻辱、殊に又先祖酒吞童子殿に對えても、額に汗のにとむ譯なり、思切つて三角に向はん、よしや、道にまて暴風に吹き廻され、怒濤に漂はざるゝ事あるも、元より則する所なりと、然れども考一考すれば、有侍の身、輕ろしく危地に入るべきものにあらず、暴虎馮河は決して大勇にあらざるなり、遂に心ならずも住吉に歸るに決す、乃ち急に漕ぎ出さんとすれども、上潮及び波浪の爲め、漸次淺所に押し上げられて動かざれば、七本の櫂を右舷に立て、力を限りに上潮及波浪に抵抗せしにぞ、十分餘にまて浮び出でぬ、乃ち急にシートに着き、勇を鼓して漕ぎ戻す、こたびは岸に沿へるが故、波浪は小なれども、横波を受くるを以て、飛沫の艇に入る事は、却て前に過ぎたり、されば漕手に更なり、艇中所とまて沾はざるなし、四時半に至りて漸く住吉小灣内に投錨し、笠岩の旅店に就く、薄暗き一室、建具なく、加之炊烟室中に充ち充ちて苦しさ云はん方なし、幸に火燵のあるあり、乃ち之に入れば、肢体伸び、精神元に復するを覺ゆ、互に今日の事ども打語らひて、はては笑ひ興ずる聲、戸

外の風聲よりも高し、一人曰く、初め砂取を發せし時、人員の少數にして、不參者の多きを怨みたりしが、若し人員にして欠員あらずば、花岡、龍田も來るべきなるに、今日の暴風怒濤にては、其の轉覆するや必せり、人員の欠けたりしは却て幸なりとぞ、一人賺さず、人間萬事塞翁が馬とは、これなりけり、と云ひて果ては大笑ひとなりけり、

かゝる程に、晝間の疲勞は漸く發え來り、火爐に入れる心地よさに、其のまゝ前後も知らず眠につく、

中宵夢驚ろき、起て窓を排すれば、狂風益々激しく、怒濤猛く吼え、遙に聞ゆる鷗鳴一聲、悲むが如く、訴ふるが如く、壯士の鉄腸是に於てかす斷せん」とす、

先是我艇の住吉に着するや石坂氏は寒風を犯して宇土に至り津奈木淺山氏に打電して風波の爲め一日延着の由を報じ夫より汽車に乗じて熊本に至り牛肉を購ひ終列車より宇土に歸り午後十二時旅舎に就けり其勞多しとすべし五日 午前四時起床、陰雲四山を罩め、波浪未だ

全く治まらずと雖、北風漸く止み、海上已に白帆の點々たるを見る、六時旅舎を出で、繫留所に至れば、昨夜の暴れに逃げ入りやしけん、大小の船、いよいよ狭き住吉の灣をみたしぬ、是に出航の準備を整へ、勇氣凜々灣口を出づ、曉風和らかに征衣を吹き、昨日の名残にや、小波時に舷を打ち、其音鼓をならすが如く、櫂聲之に和して一高一低、天女の樂を奏するが如し、四顧すれば、金峯温泉の諸山は、僅かに其下半を顯はし、恰かも霞中の芳花を望むが如く、其全体を顯はさるる所、却て風趣あるを覺ゆ、宇土半嶋は遙に南に出で、雲煙模糊の裡、微かに三角岳を望む、其右方梯形をなせるものを湯嶋とす、白帆遠く雲乎山乎の邊に出没し、白鷗高く中天にかける、嗚呼昨日は狂濤をたてし有明海、一夜の間に其狀態を變じて、今や風光明渾の舊に復しぬ、自然の物を變ずる何ぞ夫れ自在なるや、

長濱の沖を過ぎては、昨日の辛苦を回想して、汨羅の難を免れたるを喜び、覺えず握る拳に、總身の力を込めて急漕すれば、艇に忽ちにして綱田の沖にあり、三角は之より三里を出でじ、遙かの

前方に、順風をうけて三角に向へる帆前船二艘、我に先つは無禮なり、摩利支天王も照覽あれ、一勢に追ひ抜き呉れんと、六鬼、面上朱を注げる如く、權も折れんばかりに漕ぎ出す、されば艇の速なること疾風の如く、二里の間に見事二艘を後になしぬ、之よりは他に競争物もなければ、悠然として漕ぐこと三十分、九時三角に入る、乃ち更に調を整へ、威儀堂々東棧橋に着し、一同上陸す、三角は縣下有數の良港にして、港内水深く、碇泊に便なり、然れども惜むべし、口狭くして大船を容るべからず、富岡知事の起業に係り、特別輸出港たり、其築港即下は、一時繁盛を極めたりしも、其後年を逐ふて衰微に赴きしが、近時稍其舊に復せんと云ふ、十時半出發す、之より新航路に入る、富岡知事の頌德碑を左舷に望み、漕ぐこと數丁にして晝食し、勇を鼓まて三角灣を出つれば、北風全く止み、海面鏡の如く、左方に戸馳嶋あり、宇土郡に属す、右方に大矢野、千束藏々の二嶋あり、天草郡に属す、其他小嶋には、寺嶋、鬼嶋あり、以上の嶋嶼相集り、其間宛然湖水の如く、風光清絶なり、彼方此方の嶋山の美はしき

に、海さへいと清く澄み渡り、片舟に乗じて釣をたるゝ漁夫、濱邊に貝を拾ふ田婦の様、さては鹽やく煙の、枯れたる白楊の間よりゆるやかに立登れるなど、何れ詩想を催ふす種ならぬぞなき、かゝる好景に見はれて、橈も空に漕ぐこと二里餘、右方に一少村を見る、藏々村と云ふ、藏々瀬戸を出づれば不知火海なり、

不知火海

不知火海は、八代、葦北、天草、下益城、宇土、五郡の間にあり、古來、其名歴史に、口碑に、之を知らざるものなし、然り、國名の起源も亦實に此にあり、嗚呼此一海、廣袤有明海より狭しと雖、遂に筑紫の冠詞となる、宜なり、其詩に歌に賞揚措かざるや、而して吾人が目的とする所、亦實に此沿岸地にあり、皆を挾して南方を望めば、葦北の山嶽、雲煙香靄の裡に隱見す、いざや奮勵一番、秀麗なる山川に接せんかな、

去る程に、雲霧葦北一帯の山を罩め、日奈久の位置明らかならざれば、先大嶋、三嶋を目標として進む、時に風死え、海上一面鏡を布くが如く、浮鴨千百悠然として樂めるが如し、衆之を見て、

氣弛み、間々喘聲を發する者あり、右舷漕手某、生來大に『カキ』『ナマコ』を好む、今回の遠航に従ふや、二者又其目的の一に居る、此時某亦倦色あり、舵手叫んで曰く、日奈久に着かば『カキ』『ナマコ』と、云ひも終らず、某忽ち元氣を復し、『食ふぞぐ』と唱へつゝ、漕ぎ出す様の勇ましさに、一同覺えず吹出しけり、又一人曰く、不知火海は鏡の如きと、一人曰く、否々油の如し、又一人曰く、不知火海は鏡にも比すべからず、油にも較ぶべからず、實にアルコールの如しと、鏡乎、油乎、將たアルコール乎、我之を判定するに苦しむ、然れども後に思ひ合すれば、不知火海はげにもアルコールにてありしなり、かゝる馬鹿らしき話に、艇は已に大嶋と三嶋の間に來れり、左方盛に煤烟を吐けるものは、八代セメント會社なり、八代近海は、遠淺なれば、艇の膠せんことを恐れ、少しく針路を右に轉ず、前方微かに聖屋の皎々たるは、問はずして其日奈久なるを知る、加賀島を左舷に望み、漕ぐこと里餘、小築嶋、大築嶋を右舷に望む頃より、更に針路を左に轉じ、漕又漕、午后四時半、日奈久の阜頭に着く』

町民の來りて我艇を見るもの、老となく、幼となく、間々我を目して海軍兵となし、瞳をこらして遙かの沖を望み、本艦何れにありやとつぶやくもありけり、日奈久村長村田英晤氏、日奈久高等小學長藤川與太郎氏、學務委員久保氏、村役場員小學校職員、及町内有志諸氏來り迎へ、一行を導きて敷嶋屋に入る、旅舎清潔、用意周到、諸氏の苦心思ふべきなり、席定まるや、村田氏先づ口を開て曰く、遠路の航海、諸君嘸かし疲勞せられしならん、當地元より一小村、一物の以て諸君を慰すべきなし、幸に温泉のあるあり、請ふ一浴以て勞を醫せよ、旅宿に至りては余輩聊か周旋する所あり、諸君の配慮を要せざるなりと、蓋し已に旅宿一切の費用を支辨せられたるなり、藤川氏曰く、先日、郡役所より、一月四日當地御着の豫報に接したれば、昨日は生徒を引率して阜頭に待ちしも、日暮れて解散したりと、即ち風波の爲め豫定を變更せしを謝す、藤川氏更に言を續きて曰く、昨年葦北郡教育會に於て、小學兒童に、海事思想養成の法を講じ、端艇設備の議あり、遂に之が調査委員を撰び、余も亦其撰に當れり、爾

來職務の傍、調査に従事すと雖、此事に通ずるものなく、隔靴搔痒の嘆を免れず、然るに今回諸子の來航あり、幸に教示の勞を執れど、吾人元より未だ此事に精通する者にあらざるも、此美譽を聞き、焉んぞ默するを得んや、乃ち大に其學を賛し、且其地の尤も糟艇に便なるを説き、大体の點に付きて、答ふる所あり、五時半に至りて、諸氏更に明日を約して歸らる、之より艇を洗ひ、六時に至りて終る、時に小雨霏々として降り、寒風蕭殺たり、皆明日の天候を憂ふ、宿に歸りて一浴すれば、爽快云ふばかりなく、之を昨夜の火燵に比す、其差雲泥も甞ならざるなり、村役場員、小學校職員、及町内有志諸氏より、ビール半ダース、牛肉若干を送らる、好意謝するに辞なし、此夜、八人の餓鬼、ビールを酌み、肉を食ひ、蕩然として酔ひ、快談數刻、十時樽に就く、嗚呼昨日は住吉の一破屋に宿りて、着るに夜具なく、僅かに火燵に入りて煖をとりし者、豈思はんや、鄭重なる待遇に遇ひ、煖かなる蒲團に眠らんとは、(未完)

◎演說會

二月二十三日、演說會は瑞邦館に開かれたり、第一席に長壽論を辯じたるは小林一男君なり、「徹頭徹尾、滑稽戲謔の辯を弄きて、聽衆の頤を解きたり、言ふ所固より戲謔を旨とせしかば、論旨の如き亦斬新を以て評すべきにあらず、人は一代、名は末代の古諺を敷衍したるに過ぎざりしが如し、其所論の大要に曰く、人生長くとも百年に充たず、修養の三十年を除けば、餘すところ幾くもなき、況んや、古川醫學士の調査に由れば、我國民の平均年齢は三八、八に過ぎざるをや、或人は云ふ、人生の目的は幸福にありと、耳目の慾を逞ふして、人間の目的達し得たりとせば、禽獸も人間の目的を達すといふべし、夫れ人の本領は快活遠大なり、身体の保存も、思ふに其一なり、されど、わが長壽策は形骸の長壽策にあらず、人各其目的あり、此目的を貰かんと務むるは、則ち吾所謂長壽策なり、楠正成の如き、夭死して名は萬代に生けり、後世人の記憶に留りさへすれば、人は長壽したるなり、形骸の如き吾眼中にはあらざるなり、されど長壽は其方法に由りて二様に分る、惡名を残すは惡き長壽なり、短き生涯に於

て、千萬年に残る事業を成すは、至難の事に玄て、非常の勉強を要す、吾人は之を以て長壽の覺悟とせざるべからずとて降壇し、次で東戸策壇に昇りぬ、On four Dimension の題目の下に説きて曰く、代數に於て、一次方程式は幾何に於ける直線に當り、二次方程式は、平面に當り、三次式が立体に相當するが如くに、四次方程式に相當する 4Dim の世界あり、平面が直線を含み、3Dim が平面を含むと同しく、2D は吾人の 3D を含めり、此推理は實に止むを得ざるに出づ、吾人の物理學、化學、生理學、及其他の科學と兩立すべからざる事實、即ち所謂理外の理は 1D の中にてこそ理外の理なれ、2D の中には必然の出來事なり、狐狸の化くること、幽靈の出現、魔法便等は、確かに吾人の科學とインコンシステントなり、是等は多分 2D の中には相當の出來事なり、さて 2D は、常に 3D よりは優勢なり、故に若し十分に 2D を利用するを得るに至らば、何程の利益あるや計られず、吾人は諸學校に 2D の學科の設けらるゝを望む者なり、とて壇を降りぬ、次に安心立命私見を辨じたるは「中村厚次

郎君なり」劈頭、其明晰の辯を揮て曰く、安心立命は宗教、倫理上最大唯一の問題に属す、故に古來其論多し、されど余が論はそれとは異り、唯吾管見に過ぎざるのみとて、第一安心立命は何ぞや、第二人は安心立命を要するや、第三如何にして安心立命は得らるべきやにつきて分説せんとて、曰く、世には財寶を以て安心立命の基礎となすものあれど、これなほ言龜の浮木に於けるが如し、水火の災に遭へば、忽焉として消失せんとす、又世には其見聞より得たる智識の上に安心立命を置かんとするものあり、此智識にして眞の智識ならば、或は可ならん、然れども身首處を異にするの場合に臨んで、智識は到底其用をなすこと能はず、わが所謂安心立命の礎は、此等とは異れり、必ずしも學あるを要せず、唯人々の本性本心を善くするにあり、此本性は本來恐るゝことなく、天地と一体たるべきものと斷じ、さて、第二段に移りて曰く、吾人は一生中何時如何なる事に遇はんとも限らず、亦た何時身命を投して事に従はざるべからざる事なしとも限らず、此時に當り、前進後退、命を惜み、卑劣の振舞

をなさば、如何に殘念の事なるべきぞ、平生の學問を此時に用ゐてこそ、男子の本懷ならめ、かゝる心あらん人には、安心立命は最も要あり、死に臨み、よしや述懐一篇は詠し能はずとも、云ふべき遺言をなし、『サラバ』といひて死するにあらざれば、大丈夫とはいひ難し、之れわが安心立命の礎たる、明徳の修養をなすべしといふ所以なり、安心立命は唯に生死の間に必要なるのみならず、日常の事に於て然り、彼の些末の事に怒り悲ひは、男子の本懷にあらず、本心本性は元來かかる些事に頓着すべきものならず、人若し其天地と同一体なるを知らば、小憤小悲は起るべからず、これより第三段に入り、先づ大事に當りて從容たりし古人の一二例を擧げて曰く、さらば明徳は如何にして修むべきやといふに、其道こそ態々なれ、同じ高嶺の月を見んとするは一なりとて、書を讀みて得ると、古人の格書を守ると、論理の力を借るの三者を擧げて、各其非なるを辯じ、結束して曰く、さらば吾人は如何にして此礎を作るべきやといふに、此に一法あり、倫理にて理法の認識をなすが如く、吾人は唯直覺せ

さるべからず、若し吾人が妄念を去りて本心に到着せば、爰に始めて恐怖なく、憎惡なく、虚靈にして、天地と同一体たるを得ん、今や東洋多時の時に遭遇す、安心立命の礎を養ふは、最も必要の事なるべしとて、拍手の中に壇を降りぬ、次に木部守一君『眞のイーゴイズム』と題して、眞の道德はイーゴイズムなりと説けり、論は僻せりと雖ども、辨舌流暢、條理の整頓せるは能く聽衆をして聞かしめたり、先づ人は其性に合はざることをなす能はずと、前提を置き、次に儒家が忠孝は道德の根本となすに足らずとし、スペンサーの説を駁して、人の性は利己なりと斷じ、愛も利己、義も利己、良心も亦利己に外ならずと論じ、曰く、世の利己は眞の利己にあらず、瞬時の利己は千年の利己にあらず、盜の如きは瞬間の利己を、千年の利己を誤れるものなり、善は其なす處、終極に於て利己なり、盜の所爲は、其終極に於て利己ならず、故に惡なりとて、其結論を作りて曰く、人の道は性に合はざるべからず、人の性は利己なり、故に人の道は利己ならざるべからずと、次に友田教授地震計に就きて一場の講

演をせられたり、やゝもすれば乾燥無味に陥るべき科學上の題目を執り、縱橫快辯、巧諛の中に聽者に耳を傾けさせ給ひしは、一句を残さず筆記者の手に寫されたり、論說内に特に掲ぐべきものなれば、爰には其梗概を略す、右終りて、茶菓の饗あり、十時半開散、誇學の風、漸く盛にして、高談放語、四筵を驚すものなく、利己の風、漸く大にして、慷慨叱咤の聲を聞くなし、名を研究に藉りて、強て其無氣力を蔽はんとす、之れ吾銷沈せる青年界の現狀にあらざるなきか、吾人郷校にあるの日、演說會に臨む毎に、紅顏の輩、壇を爭ふて起ち、或は切齒し、或は扼腕し、慷慨悲憤の辯を揮ふを見たりき、言固より疎、辯亦美ならざりといへども、激越の情、楚々の誠、改革の先導たるべき青年にありては、當に以て然るべしと思へり、爾來再三年にして、此轉變を見る、われ今日の是にして、往年の非なるか、果た往年の是にして、今日の非なるか、得て知らずといへども、今日の銷沈萎靡を以て、社會の舞台に出でん日、卓勵風發能く風雲を叱咤し得るや否や、吾人疑なき能はず、遮莫、こは時勢の變にして、わ

が校のみのことにはあらじな、嗟、

◎鏡 開 式

夢魂吾に還て殘月白く、破窓風急にして擊柝寒玄、汗に氷れる稽古着一貫、腕をさすりて中庭に出つれば、道場晝の如く明し。突擊奮闘、叫吶轉頓、大太刀を眞向に打翳すもあれば、下段に下げて、打てよくと、手許に附込む勇者あり。拂はんの一足を左にかはえて、膝車にせんもあれば、寄り来る敵を、引手にすかして後に投げんの壯士もあり。嗚呼、三七、二十一日、吾人をして如何に壯快の日記を記さしめしよ。

二月一日を以て其終末を告げ、二月六日を以て、目出度く鏡開きの式を我瑞邦館に舉ぐ。櫻井副會長、長尾劍道部長、加來柔道部長、中島、野田兩劍道師範、戸張吉村兩柔道師範各着席、友枝柔道部委員、先づ立ちで、我校寒稽古の沿革を述べて、開會の辭に代へ、終りて、櫻井副會長、會長代理として皆勤者に精勤賞書を授與せらる、劍道部十七名、柔道部 名。續きて、兩部各數番の勝負を試む。二十一日、日固より長きにあらずと雖、體の進退、劍の打込、蓋し一段の進歩

を得たり。

式終りを告げて、雜煮會となる、皆健啖精勤の賞を博したるは、或は北寮某氏の八椀二十四個ならんか。

校 報

一月三十一日

元非職教授

佐久間信恭

在官六年以上ニテ退官ニ付年俸月三ヶ月分下賜

二月四日

囑托

中嶋 春海

寄宿者物品監守者及物品取扱主任ヲ免ズ

二月五日

囑托

岩田 靜夫

物品檢閲委員ヲ命ズ

二月七日

鈴木千代吉

當校圖書測量科ノ講師ヲ囑托シ爲報酬一ヶ月金八拾圓贈與

非職教授

佐久間信恭

依願免本官

二月十四日

講師

下山 秀久

願ニ依リ囑托ヲ解ク

二月十八日

岩森 彌助

當校物理學科實驗授業ヲ囑托シ爲報酬一ヶ月金貳拾五圓贈與

三月一日

囑托

鈴木千代吉

右池田ト改姓

雜 報

三月十四日

囑托 岩田 靜夫

金監心得ヲ命ズ

左の四中學校は今回新たに我校と連絡を通したり

福島縣會津尋常中學校(二日)

愛媛縣第一尋常中學校(全)

新潟縣尋常中學校(全)

大分縣中津尋常中學校(三日)

學窓時事及慨言

硯友會

本月十三日紅葉が岡にて硯友會を開

く會するもの拾有七名校長閣下の御臨席を辱ふし頗る盛大なりき即席の詩歌並に連歌の草稿積んで寸餘に及ぶ一々稼堂先生の清風を仰ぎ其朱線を得たるものは載せて本誌の文苑欄にあり其他講談あり餘興ありて春日の永さを忘る而して當日又もや校長閣下及び稼堂先生より過多の御寄附を戴きたれば一同大に感謝し一献を傾けて歸る此の日幹事の改撰を行ひたるに中熊直喜君當撰し快く引き受けられたり本會の隆盛期して待つべし多望々々(幹事役)

大日本佛教青年會の會員諸氏は、二月二十